

## 授業報告Ⅲ

2009 年度夏学期 ドイツ語圏思想

責任担当者：藤野寛（言語社会研究科）

2009 年度の夏学期、前年度に引き続き、私は学部講義「ドイツ語圏思想」に論文指導のチュートリアルを併設した。講義内容は、「アドルノと哲学に入門する」というもので、原則的に 90 分、私が 1 人で喋りまくる形式の授業となった。私は授業への出欠確認を取らないので、単位認定は、全面的に、セメスターの最後に提出されるレポートによって行うことになる。そういう事情にあったので、チュートリアルにおいて行われる論文指導にかかる比重はとても大きなものとなった。

大学教育センターによる TA 支援制度に加えて、佐野プロジェクトからの資金を利用できたので、山内さんと和田さんにチューターをお願いし、5 回ずつのチュートリアルをそれぞれ 2 サイクル開設していただいた。

問題は受講学生数だが、予想を下回り、36 名だった。その中で、チュートリアル受講を希望したのは、19 名。山内さんに 8 名、和田さんに 11 名を担当していただいた。実際に提出されたレポートは 21 本だった。

私自身の反省としては、昨年度と同様、私の講義の内容と学生諸君のレポートのテーマとの関連性の弱さという点が、何にもまして指摘されねばならない。私は合計 13 回、アドルノの哲学について講じたのだが、提出されたレポートで、アドルノをテーマとして取り上げるものは 1 本もなかった。アドルノが哲学者としてそれほどポピュラーでない以上、これは予想された事態ではあった。そもそも、この講義を「アドルノと哲学に入門する」と題したのは、「アドルノおよび哲学に入門する」だけでなく、「アドルノと一緒に哲学に入門する」という意味を含ませようと考えたからである。受講生諸君が広く哲学に入門してくれば、それで目標の半ばは達成されたのであり、必ずしもアドルノ哲学への入門に

こだわるものではなかったのである。

そういう事情であったので、学生諸君のレポート執筆にとって、私の講義そのものは、直接的にはほとんど何の役にも立たなかったのだろう。加えて、彼（女）らの多くは、取り組んでみたいテーマを（漠然とではあれ）既に抱えこんでいた。だからこそ——再度言えば——なおのこと、チュートリアルへの学生諸君の期待と依存は大きかったに違いないのであり、その意味でも、山内さん、和田くんのご苦勞は大きかっただろうと想像される。その詳細については、以下のお2人自身による報告と、チュートリアルを受講した学生諸君の何人かによる感想文から読み取っていただければ、と思う。

（ふじの・ひろし／哲学）